

第二章 外蒙古とはどんな處か

第三章 革命前の外蒙古

第四章 蒙古人民共和國の成立

第五章 共和國成立後の政治概観

第六章 外蒙の反ソ獨立抗争史

第七章 資源と産業

第八章 共和國の財政と經濟

第九章 宗教、文化、教育

第十章 最近の外蒙軍事

(四六版、二六七頁、圖版三二、卷末折込地圖一、東京 伊藤書店  
刊、昭和十四年十月、壹圓八拾錢) (淺井辰郎)

## 尙書正義定本

### 東方文化研究所經學文學研究室編

漢の武帝が儒家の經典をもつて思想の統一を計つて以來ずつと清朝の終まで二千年の間、支那の精神文化を國家的に公式に規定して來たものは經學である。支那の知識階級は官僚によつて代表されてゐたが、その官僚は經學的教養によつてその地位を獲得しまた維持して來た。概論的にいふならば、經學は、彼等の生活意識が經典及び經師の傳統を所與の範型としてその型式下に具現してゐるものである。その型式が極めて鞏固に定形化されてゐた爲にどの述作もマンネリズム的な外貌を呈し個性の色彩を稀薄にしてはゐるけれども、しかし經學的述作は遂にその作爲された

際の時代表現の創作的な表現であることを看過してはならない。彼等が「經書に書いてある」こと、「むかしあつた」こと、してものいふ時、それは實に「現在に於て當にしかあるべき」こととして意味してゐるのである。換言すれば超時間な當爲を彼等の現在に於て把握し主張してゐるのであつて、過去に營てあつた歴史的な一事件の爲に述べてゐるのではない。従つてもし經書の記事を資料として古代史を攻究せんとする人々が、經學者の述作に古代史學的な期待を以て臨むならば、それは初めから見當を逸してゐる。

經學的述作の一である尙書正義に對する従前の非難は實はかうした見當違ひの要求の満たされぬことから放たれてゐた。歴史上に於ける堯舜及び夏殷周三代の文化を闡明する上からいつて、尙書正義三十萬言はいたづらなる贅言の繰り返しであり退屈と滯滯以外の何物でもないにしても、尙書正義のもつ本來の價値はそれによつていさゝかも損はれはしない。尙書正義はこの冗長に似た繰り返しに、その時代すなはち支那中世の經學界の主潮の認識を要求してゐるのである。正義の敘述を繁雜ならしめてゐる要因として、直接經文に臨まずして傳注を介在せしめてゐることや、注釋に討論の形式が用ひられてゐること、訓詁の爲の訓詁を加へてゐることなどが、單に外形上から見ても著しく眼につく。しかし此等は同時に支那中世の思潮の主要なる類型をあらはしてゐるものである。これに關しては東方文化研究所經學文學研究室主任研究員吉川幸次郎氏によつてなされた尙書正義解題(東方學報京都第十册三分)を参照されたい。加るに尙書正義は唐の勅撰書で

ある。衆訟渦巻く六朝の後を受けてそれ等の著書を示さんとする意圖が見える。縷々たる三十萬言はまことに支那中世の知性の世界を顯現してゐるものである。正義が要求する意義は當にこゝに認められるべきではあるまいか。支那の經學者は史學を正當に獨立せしめ得なかつたために、學問を系統的にすることが出來ず、知性の發達を阻碍したことは責められねばならない。しかし經學的述作に正しい地位を與へ得ぬならば、現在の我々史學者も亦經史混淆の責を免れ得まい。

わが東方文化研究所經學文學研究室に於て按定した尙書正義定本が如上の意味に於て支那精神文化開明の上に資し得るならば、それは最も本懐とするところである。その日の近からんことを自らも期してゐる。その限りに於て、われらの按定が準備の學であることはいふまでもない。しかしいづれは文化史學の一階程であるにしても、階程そのものはそれ自體としての獨立性をもちその完結性を要求する。茲に一字一句も忽せしむることを許さない所以がある。もし中世文化の資料蒐集の爲になされたのであれば、ただはずともよきところに仇讎の争にも似たる論議が繰返されてゐるのである。けだし中世文化の研究の爲にこの書を読むといふよりは、この書を読むことによつて中世文化の理解に到達せんとする態度を選んでゐるからである。そしてこれこそ本書の刊行に際し讀者の特に留意して戴きたいところである。

按定の成果に對しては、稍々人事を盡し得た喜びを覚えてゐる。按定の態度は既に右に述べたが、按定の資料も、唐鈔本が西陲に

於て見出されてあり、博士家秘傳の書が我國に珍藏されてあり、刊本も亦單疏八行十行と豊富に残つてゐて、しかもそれ等を殆んど全部とり揃へ得たことは、前人の未だ曾つて享受し得なかつた幸福であることを有難く思つてゐる。それら資料の詳細に關しては定本の序を参照されたい。

今般刊行した尙書正義定本の第一冊は虞書の部であり、孔安國尙書序・堯典・舜典・大禹謨・皋陶謨・益稷の諸篇を收めてゐる。また通行本に載せられてゐない唐の長孫無忌及び宋の孔維等の上表も附載した。本文には句讀を施し、後に按勘記を添へた。別に讀尙書注疏記を東方學報に連載して按定工作中の諸問題を述べてゐる。猶、吉川主任研究員よつて國譯がなされ、本誌が玉凡に上る頃には岩波書店より刊行されてゐるであらう。これ等を綜合することによつて尙書正義を尙書正義として整へることはやゝ形をなしたかと思ふ。第二冊以下も引續き刊行の豫定である。

編者の求めによるものとはいへ、按定の末席にある者みづからこの文を草することは、やゝおこがましき感ぜられる。しかしそれを敢てするものは正にわれらの勞作に對し諸先生並びに諸賢の御叱正を乞ひたき微衷に他ならないのである。(東方文化研究所刊、四六倍版、和裝本金七圓、同經學文學研究室刊、洋裝普及版、金壹圓五拾錢) (平岡武夫)

### 雲岡石窟とその時代

支那歴史地理叢書第一

水野清 一著